

中国への短期留学を考える

谷野 典之

行くぞ中国に！

語学力というものはなんなのだろう。文法が理解できている、教室内で練習する日常会話をマスターする。これすなわち語学力なのだが、こうしたスキルの習得だけでは中国社会において中国語でコミュニケーションを果たしつつ生き抜いてゆくことは、おそらく一日たりともできないように思う。中国語を使って中国とつきあっていくためにはこうした語学力を支える、ある種の文化的な、あるいは精神的な基礎体力がなければならないのではないか。

教科書によく見られる「買い物」の場面ではふつう、「すみませんが〇〇をください」というところから始まっている。こちらがそう言うと、店員は「××元です」と答えることになっている。ところが、実際に中国で買い物をしてみると「〇〇をください」と言うべき相手の店員はしばしばカウンターの向こうで仲間とおしゃべりに夢中になっていたり、一心不乱にセーターを編んでいたりで、かねて用意の教科書通りの会話を繰り返す余地がない。まずは店員の注意をこちらに引きつけ

なければならない。おろおろしているうちに後から後からほかの中国人の客がやってきては店員をつかまえて買い物すませせていくのに、かわいそうな日本人は礼儀正しく「すみませんが……」を繰り返しながら店員からは相変わらず無視され続けることになる。

バスに乗る。教科書によれば車掌が「どこまでですか？」と言うのに対して「〇〇までです」と答えることになっている。だが、暴力的にまで混みあったバスのなかほどにまで詰め込まれて乗ってすぐに切符を買うことすらできない。ようやく車掌のところまでにじり寄って「〇〇まで一枚！」と言えたと思ったら「どこから乗った？」と冷たく尋ねられる。はて、さっき乗ったバス停はどこだったっけ。えーと、えーとと口ごもっているうちに目的地に着いてしまった。降りようにも切符を買っていないので降りられない。無理に降りようとしたら無賃乗車とみなした車掌が機関銃のようにまくしたて始める。普通の日本人ならこのへんで血の気が引いて膝から力が抜ける。

このようなことは教室では教えられないし、どんなに優秀な学生でもそれ

を体験せずに学ぶことはできっこない。こうした事例を教室で紹介して、中国ではどんな場合でも自分の意志を明確に相手に伝えなければならぬと締めくくることが簡単である。しかし話を聞いた学生は、それでも中国社会を理解し興味をもち続けられるだろうか。まず十中八九は「そんな恐ろしいところには行きたくない」と思うはずである。ところが実際に行ってみると、このような苛酷な場面であっても時として信じられないほどおせっかいな中国人が現れて「この人に買い物をさせてあげなさい」とか「さっきこの人は〇〇から乗ってきた」という助け船を出してくれるのである。おまけにその見ず知らずのおじさんやおばさんが半日買い物につきあってくれたり、わざわざ遠回りをしてこちらの行きたいところまでついてきてくれたりする。道々話をしているうちに「今夜はうちで食事をしていきなさい」と誘ってくれ、あとで思い出すたびに心の底が暖かくなるような歓待を受けることにも、誇張でなく実際しばしば会うのである。そしてこのような腰の抜けるような体験を経て、中国語のコミュニケーションの面白さ、知れば知るほど異なった側面を見せる中国文化の奥深さに目覚めていくのである。

まずは出かけてみよう。冷たいプールに飛び込むようなものだ。手先、足先だけで触れていれば水の冷たさに怖気を震うばかりだが、まずは頭からどぶんと飛び込んでみよう。泳いで行く

うちに水の感触を楽しみながら泳ぐ爽快な気分を感じ取ることだろう。行くぞ中国に。信じられないような事件が君たちを待っているぞ。人生観変わったっちゃうかも知れないぞ。

夏休みを利用した中国への短期留学プログラムは、こうして始まったのである。

短期留学のプランニング

旅行にはふたつの方法がある。旅行社にかなり割高な言い値を払って楽をするか、それともすべての厄介事を自分で引き受けて安く上げるかだ。中国旅行で困るのはその中間というものがないことである。つまりリーズナブルな費用で快適な旅というのは望めない。あらゆる不便を金で解決するか、それともそれを自分で解決するか、もちろん安く行こうじゃないか。というところから話は始まった。1992年のことである。

幸いその年から本学に中国語の非常勤講師として来ていただいていた閻全寿先生（すでに退職）が、本学の協定校である山西大学のご出身であった。閻先生に間に立っていただいて山西大学に協力をお願いしたところ、かなり割安な費用で中国語研修三週間、旅行一週間の短期留学が実現しそうであった。費用を抑えるために旅行社は通さず、行きはイラン航空のディスカウントチケットで北京へ。帰りは当時でわずか2万円ほどの運賃で乗れる船で上海から、というプランを立て、こうし

たチケットの手配から中国側との連絡、大使館でのビザの申請など日本側で行なうべき事務手続きは全て私と閻先生で行ない、中国での列車やバス、宿泊などは山西大学の渉外部門である外事処に実費でお願いした。実際には実費とはいうものの、「定価なき国」中国のことである。ああ言えばこう言う式のねちっこい交渉を重ねて、値切りに値切り、その実費も当初提示された費用の七割ほどに抑さえた。その結果、現在とは比較にならない円安時代ですら26万円程度の総費用が実現できた。ちなみに当時の同程度の内容の一般の短期留学は34～35万円である。

費用の交渉と並行して山西大学に対して教学面での要求を提示し、いくどかのやり取りの末、次のようなガイドラインを受け入れていただいた。

- ①クラスは上級・中級・初級の3クラス編成とし、学生の能力に応じたカリキュラムを用意する。
- ②平日の午前中の8時から12時までを語学研修とし、午後は基本的に自由行動とする。
- ③午後の自由行動時間帯に、各種の自由参加形式の講座を開設する。たとえば中国の民族楽器である胡弓のレッスン、水墨画教室、歴史講座など。人氣のある大極拳は早朝の六時半から毎日ということになった。
- ④週末と日曜を利用して近郊の歴史名跡への日帰り、または一泊の小旅行を行なう。

さらに語学研修以外到北京三日、西



山西大学での授業風景

安三日、上海二日の旅行プランも立てた。この教学上のガイドラインおよび旅行プランは、この1992年の第一回から1995年の第四回まで基本的に維持され続けることになる。昨年1996年夏には研修校を山西大学から上海復旦大学さんせい しやんはいよくたんに変更したが内容は引き継がれている。

募集と応募の状況

この短期留学プログラムは、授業では体験できない現実のシチュエーションのもとで中国語を学ぶことを目的としているため、募集対象は原則として中国語を履修中の学生としている。毎年四月に中国側と教学内容、費用、日程などの調整を行ない、それらが確定した五月初旬にパンフレットをワープロで作成し、開講されている中国語クラス1クラスあたり20枚ほどの割り当てで枚数を用意する。旅行会社に間に入ってもらえばこうしたパンフレットは旅行会社で作成してもらえるが、すべて自力更生である。自分の担当クラス以外は、非常勤の先生方に配布をお願いすることになるが、やはり教室でのインフォメーションに温度差が出るのはやむをえないことであるらしく、

実際に応募してきた学生のかかなりの割合が専任の担当クラスの学生ということになる。

当初は教室でのパンフレット配布と同時に、学内での掲示を考え、実際最初の年は国際センターに事情を説明し、センターの掲示板に拡大コピーしたパンフレットを貼り出させていただいたことがある。ところが応募を考えている学生の父兄からこのプログラムの詳細に関する問い合わせが何件か一般教育課程教務課に寄せられるということがあり、「本学の正規行事でない活動の案内を学内に掲示するのは困る」という指摘を受け、以来掲示は行なわないようにしている。正規行事ではないということはパンフレットにも明記し、短期留学中に不慮の事故に対しては学生個人に加入を義務づけた海外旅行保険によってのみ保障される。これに同意されるか、という内容の保護者に対する同意書も申し込み書に添え、詳細の問い合わせ先として私の連絡先を掲げてはいるが、それでも毎年のように父兄からの問い合わせが教務課に寄せられるという。教務課としてもその対応に苦慮されていることは私も重々承知しているので、毎年教務課には頭を下げている。どうもすみません。

正規行事ではないことは別段非合法でもうしろめたいことでもない。こちらがなにもしなければ学生は一般の旅行会社の企画する同様のプログラムに参加することだろう。それならば大学に迷惑をかけることもない。だが、一

般のプログラムよりずっと良い学習環境を用意し、費用も安く、なにより立教生だけのグループで行動できるという安心感がある自前のプログラムを実行しようとする、正規行事ではないという立場上あまり華々しく宣伝するわけにもいかない。きっと本来ならば教室でのパンフレット配布なども好ましくないということになるであろう。しかしそれは黙認していただく以外にない。そのほか、興味のある学生に対する説明会なども学内で行なうのはよろしくないというので学外で場所を借りたりしている。もちろん個人的に研究室を訪れて説明を聞きたいという学生が来るのはいたしかたない。こそこそしなければならぬ筋合いはないのだがいろいろ気骨が折れるものである。

さて、募集の内容だが、中国内の宿泊や交通機関の手配の関係から定員は30名である。実際の応募者は一昨年までの実績で、毎年24名から30名であった。ところが昨年になって急に希望者が殺到し、なんと60名以上が応募してきた。昨今の中国への関心の高まりが背景にあることは間違いないが、昨年からは中国語の専任が2名増えて3名となったため、その専任のクラスからの応募が増えたことが直接の原因ではないかと思う。さらにこのプログラムが毎年続けられているため、過去において行きたくても行けなかったという高学年の中国語履修経験者も在学中に短期留学を経験したいと応募してきている。結局昨年は受入れ先の復旦大学に

無理をお願いして、41名を受け入れることになった。応募したにもかかわらず行けなくなった学生諸君はたいへん申し訳なく思っている。

短期留学の成果と問題点

語学教育における最も重要なポイントはなにか、という点について、私の考えは極めて明瞭である。それは教授方でもカリキュラムでも教育施設でもない。それは動機づけである。本来その他の要素はすべてその動機づけの後に位置するものである。動機のない学習は虚しい。たとえば自動車に乘客としてすら乗ったことのない者に車の運転を覚えろというようなものである。もちろんいずれ車の運転が必要となるだろう、車が運転できたらいいだろうなど感じている者にそれを教えることはできる。さしずめ英語教育などがこれにあたるだろう。しかし車とはなにか、どんなものか、それによってなにかできるかを知らず、ましてドライブの爽快を想像もできない者に車の構造や交通法規を教える。初習外国語とは、いわばこうしたシチュエーションのなかにある科目である。なんとかそこを打破したいと考えて始めた短期留学プログラムであるが、果たしてその成果はどのようなものだろう。

夏休みの短期留学を終えて帰ってきた学生は、まず表情が違う。つたないながらも自分で中国語を使って友人を作り、バスに乗り、買い物をし、値切り、ぼられ、騙され、小さな成功と失

敗を体験した学生の顔は何かしらひとまわり大人びて見える。短期間とはいえ、日本人にとっては決して楽とは言えない中国社会を一か月もぐり抜けてきた自信と成長がそこに読み取れるようだ。教室内での授業でも、中国で覚えた単語がテキストに出てくる。テキストの例文を見て、そうかあの時はこう言えばよかったのか、という発見もある。つぎに中国に行くときにはこの単語を使おう、このように言おうという目的意識がある。総じて非常に高い教育効果を感じるのである。

その一端を中国の協定校への派遣留学生に見ることができる。現在立教の中国における協定校は、短期留学でお世話になった山西大学のほか、天津の南開大学、香港の中文大学の三大学である。短期留学を始めて以来、これらの大学への派遣留学生のうち短期留学経験者の占める割合は極めて高い。それ以外でも、卒業後に自費で中国へ留学したり、日本国内で残留孤児の帰国者のためのボランティア活動を始めたりとといった例が見られる。短期留学以後、二度三度と中国旅行に出かける例はさらに多い。いわば中国へのリピーターを作り出しているのである。短期留学のメリットは、一か月の中国生活によって語学力を高めるという短期的な効果だけでなく、こうした学習の方向づけによる長期的な効果をもたらすのである。

一方の問題点として、教員側の負担をあげざるを得ない。毎年夏休みの一

か月間を短期留学の引率に当てることは実際上不可能である。これまで五回の短期留学のうち、一回目と二回目は私が引率した。五回目の昨年は新しく専任となられた呉悦先生に引率をお願いし、あとの三回は引率なし。参加学生のなかから互選で「団長」を選出してもらい、その団長にリーダーシップをとってもらおうという方法であった。しかし引率があるのとないのでは、生活面での安心感だけでなく、学習面での効果にも大きな影響をおよぼす。学生だけでは短期留学が容易に修学旅行化してしまい、これでは一般の業者の短期留学に参加するのとなんら変わりがなくなってしまう。受入れ先の中国の大学としても、生活や教学面でなんらかの問題があった場合に相談できる相手がいないというのでは対処に困ることもあるだろう。

逆に教学の質に問題があったり、レベルが学生に合っていないというようなことに関して、学生自身が留学先の大学に対して改善を申し入れることも、実際問題として難しい。プログラム全体のコーディネイターとしての引率教員の役割は大きいと言える。

引率の効果はそれにとどまらず、たえず学生と接触し、学習上の相談相手

となったり学生が体験した「事件」についてその文化的背景を語り合うなど、いわば移動教室での集中ゼミ的な効果を生み出すのである。

現在のプログラムでは、中国の語学研修は一日4時間、週末を除く16日間ほどであり、授業時間は単純計算で64時間になる。これは90分授業に換算すると42時限に相当する。大学での4単位には欠けるが、かりに2単位とすれば堂堂たる2単位となるだろう。実際その短期的、長期的学習効果を考えに入れば、このような短期留学を正規の単位として認定する価値は十分にある。多様な教学形式が摸索される昨今の状況のなかで、このような短期留学の単位化は現実の問題として検討されるべきだろう。かりに単位化には時間がかかるとしても、たとえば明治大学が今年から始めたように、協定校への短期留学を国際センターがバックアップし、大学の正規行事として位置づけることになんら不都合はないのではなからうか。全学的な前向きな議論を期待したい。

(たにの のりゆき 本学大学教育研究部教授、全カリ運営センター言語専門委員)。